

2021 年度 入学試験問題

国 語

(帰国生入試)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人はだれでも常識を信じ、常識にしたがって行動する。それはそのほうが楽であるし、常識に反して行動すれば信用を失うからである。そして常識とはちがう事態に出あうと、人は当惑する。

一九六〇年代の夏は当惑の連続であった。

一九四五年、アメリカ進駐軍^{しんちゅうぐん}とともに入って来たと考えられるアメリカシロヒトリという害虫が、北海道と南の島々を^aノゾきほとんど日本じゆうに広がっていて、町の街路樹やサクラを食い荒らすので、大問題になっていた。

アメリカシロヒトリは小さなまっ白い蛾^がで、ヒトリガ（灯取り蛾）の一種。その幼虫の毛虫が集団となって木の葉を食い、木を丸坊主^{まるぼうず}にしてしまうのである。

国も自治体もなぜかえらく神経質になって、「アメリカシロヒトリを町から追い出せ」という大々的なキャンペーンが始まった。たくさん^bのハデなポスターが貼られ、殺虫剤を撒く車が何台も出動した。人々は庭先で毛虫を見ると、アメリカシロヒトリが出たと通報する。それは異常としか言えない状態だった。

長らく昆虫の研究をしてきたぼくらは、これに^①少なからぬ憤りをおぼえた。アメリカシロヒトリは木を丸坊主にするけれど、けっして木を枯らさない。枯らしたら自分たちの食う木がなくなってしまうからだ。自動車の出す排気ガスのほうがよっぽど悪い。アメリカシロヒトリはスケープゴートにされている。

ぼくらはアメリカシロヒトリ研究会という研究会をつくり、この虫がどんな生活をしているのか、原産地とは気候も食べ物も相当にちがうはずの日本に、なぜこんなに元気よく住みつくことができたのかを調べてみることにした。

ぼくはこの虫の繁殖行動の研究を受けもった。アメリカシロヒトリは蛾の一種だ。たいていの蛾はメスが性フェロモンを放出し、オスを誘引して交尾する。アメリカシロヒトリも同じようにしているにちがいない。

当時ぼくは東京府中にある東京農工大の教員をしていた。早速ぼくは研究室の学生たちと研究にとりかかった。

害虫の性フェロモンの研究をするときは、まずふつうの白い紙コップの中にその虫の処女メスを入れ、直径一センチぐらいの丸い穴をあけた紙でふたをして、それを木の枝などに吊しておく。

一般に蛾は夕方から夜にかけて繁殖活動をするので、メスの入った紙コップは夕方野外にセットして、翌朝それを^cカイシユウし、紙コップの中にどれだけオスが入りこんでいるかを調べる。オスがたくさん入っていたら、性フェロモンの存在の証明になる。これが常識であった。

ぼくからもこの常識に従って、毎日夕方、サナギから出てくる新しいメスをつかまえ、紙コップ

に入れてセットしていった。

一週間ほどそれをつづけたらどうか。結果は惨憺たるものであった。紙コップの中にはオスが一匹も入っていないのである。アメリカシロヒトリには性フェロモンがないのか？これが当惑の始まりだった。

でもぼくはすぐ思った。こんな「常識的手法」ではだめだ。虫そのものの行動を見なくては。ぼくは夕方から深夜まで、サクラの木の下に立ちつづけて、アメリカシロヒトリの動きを待った。

だが何事もおこらなかつた。サクラの梢の葉裏にとまった白い蛾たちは、深夜までぴくりとも動かなかつたのである。

そこへ先輩からの話が伝えられた。朝四時ごろトイレに起き、何気なく外を見たら、サクラの木のみわりを白い蛾がたくさん飛びまわっていた、というのである。

サクラの木のまわりの白い蛾。それはアメリカシロヒトリにちがいない。ぼくは観察の時間をまちがえていた。この蛾は常識とはちがうのだ！^② 当惑はある種の期待に変わった。

早速何匹かのメスをサクラの枝に糸で止め、夜中からその前に立って、じつと見ていた。

午前二時。午前三時。何事もおこらない。メスたちはじつと動かずにいる。

四時少し前、一番鶏の聲がした。そしてヒグラシが鳴きだした。東の空がほんのり明るくなる。とたんに何匹かのすばしこく飛びまわる白い蛾が目の前に現れた。オスだと直感した。

気がついたら、メスたちもいつの間にかはねを立てている。オスはそのまわりを二、三回まわったかと思うと、さっと一匹のメスの傍らにとまり、あつという間に交尾してしまった。あれよあれよという間のことだった。

研究はここから一気に進展した。^③ 常識的な紙コップ法がなぜだめだったかもすぐわかった。

オスはほとんど真上から、メスに飛びつくようにとまる。メスを緑色や青に塗ってみると、そのメスはオスに無視される。性フェロモンはちゃんと放出しているはずだし、そもそもメスたちのまわりには性フェロモンが充滿しているはずなのに、である。

試しに白い小さな紙切れを緑色のメスの隣に置いておくと、オスはこの紙切れに飛びつく。しかし近くにメスがいないければ、紙切れに飛びつくオスはいない。

つまり、性フェロモンだけではだめなのだ。オスはちゃんとメスの姿を見て飛びつくのである。次の朝、ぼくはメスを入れた紙コップも観察した。現れたオスたちの何匹かは、紙コップのまわりをぐるぐると飛びまわった。だが中に飛びこんだオスはいなかった。十数秒の旋回飛行のうち、オスはパイと紙コップから飛び去った。白い紙コップのまわりには性フェロモンのおい立ちこめていたけれど、肝腎のメスの姿が見えなかつたのである。

「蛾は性フェロモンの匂いのする中でメスの姿を探す」ということを「科学的に」実証するために、ぼくはそれからいろいろな実験をした。メスの姿を隠すとか、紙モデルをつくってそれを置くとか。

④ 初めのころの当惑も、その理由がわかってみればただの当惑ではなくなった。それどころか、それが新しい認識を開いてくれることになったのである。

けれどもやがて、ぼくはまた当惑することになった。

「蛾のオスは夜の暗闇くらやみの中で、遠くから風に乗ってただよってくる、かすかな性フェロモンの匂を敏感びんかんにキャッチし、それに導なちびかれてメスのところへ誘引される」このことは当時の常識であった。

(中略)

でもオスたちは、ほんとうにそんな遠くからフェロモンに誘引されるのだろうか？ ぼくにはどうもそれが信じられなかった。フェロモンでそんなに魔術まじゆ的なものなのだろうか？

前に書いたとおり、性フェロモンにひかれてやってきたオスは、最後にはメスの姿を探す。何キロも遠くにいて姿も見えないメスから、風に乗ってただよってくる性フェロモンのかすかな匂い。それにひかれてひたすら風上へ風上へと飛んでゆくほど、オスは X 的なものなのだろうか？

考えてみると、それまでの観察で、オスが風下の遠くからメスのところへ飛んでくるのを見たことはなかった。なぜだろう？

そこで性フェロモンを放出しているメスの近くで、あたりをオスがどのように飛んでいるかをよく注意して見ることにした。

そのときぼくが観察していたアメリカシロヒトリという蛾は、まっ白くてよく目立つ虫であり、その時間帯には他の蛾はほとんど飛んでいない。観察はしやすかった。

そろそろうす明るくなってきた中で目を凝こらして見ていると、オスたちはじつにでたらめな飛びかたをしていた。風の方向はたえずチェックしているのでよくわかるのだが、オスは風向きとは何の関係もなく飛んでいた。風上に向かうのもいるが、風を横切って飛ぶのもいた。風下に向かつて飛ぶのさえいた。いろいろな人の論文や学会発表とはまるでちがうではないか！

ぼくは縦四メートル、横六メートルという大きな黒い布の幕を大学の校舎の横につり下げ、その中央より少し下に、メスを数匹入れた金網かなあみのかごとりつけた。そして少し離はなれたところから、黒幕の上を飛ぶ白いオスの蛾の飛跡ひせきを記録した。

当時学生だった櫻井勝君と一緒いっしょに、この観察を何回かしてみたら、結果はじつに明らかであった。

オスたちは大きな黒幕の上を、風向きとはまったく関係なく、ものすごい速さで飛びながら通りすぎてゆく。右上から左下へ、右下から左上へ、上から下へ、途中とちゅうでぐるりと向きを変えて、もどきた方へ戻もどっていくのもある。まさにでたらめというからランダムという他ない。

七月の末というその季節には、たくさんのオスが次から次へと現れ、黒幕の外へ消えていった。メスの入った金網のかごなど、まったく無視されているようだった。

ところがそのうちの一匹が、たまたまメスのかごの風下側二メートルほどのところを通過した。

そのとたんオスは飛びかたを変えた。いきなり飛ぶスピードを落とし、それまでの直進からジグザグ飛行になって、かごに向かつていったのである。そしてかごに飛びついた。

まもなくもう一匹が同じようなことをした。そしてしばらくしてまた一匹が！

これで多くにはもうわかった。オスたちは性フェロモンに遠くから「誘引」されてなどいないのだ。

オスたちは猛烈なスピードでランダムに飛びまわり、メスのごく近くで性フェロモンが高濃度にただよっているところ（ぼくはこれをフェロモンの「有効圏」と呼ぶことにした）を探している。そしてたまたまそれに遭遇すると、突然に飛びかたを変え、ゆっくりジグザグにフェロモンゲンに近づきながらメスの姿を探して、彼女に飛びつくのである。「遠くから誘引される」というのは、この積極的な探索の結果なのだ。⑤性フェロモンは魔術ではなかったし、オスはひたすらフェロモンに誘われる受動的な存在ではけっしてなかった。

（日高敏隆「常識と当惑」より）

問1 —— 線 a、d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん に入れるのにふさわしいことばを文中より二字でぬき出して答えなさい。

問3 —— 線①「少なからぬ憤りをおぼえた」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 アメリカシロヒトリといえはすぐに害虫と見なしてしまうような世の中の画一的な考え方に対する些細な皮肉。
- 2 アメリカシロヒトリが入ってきた経緯をまったく無視しているような近視眼的な考え方へのあからさまな批判。
- 3 アメリカシロヒトリを無差別に根絶やしにしてしまえばいいというような乱暴な考え方に対する強い反発。
- 4 アメリカシロヒトリという名だけからその生き物を忌み嫌うようなかたよった考え方への言いようのない不安。

問4 ——線②「当惑はある種の期待に変わった」とありますが、どのような考え方があったことで当惑が引き起こされたのですか。それが具体的にわかる部分を解答らんに合うように、文中より二十字程度でぬき出してはじめて終わりの三字で答えなさい。

問5 ——線③「常識的な紙コップ法がなぜだめだったかもすぐわかった」とありますが、最初の実験で紙コップの中にオスが一匹も入っていなかった理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 オスは紙コップという未知の物体をおそれるあまりメスに近づこうとしなかったから。
- 2 メスの放出する性フェロモンが紙コップにさえぎられることでオスに届かなかったから。
- 3 紙コップの中のメスがはねを立てていないことでオスは関心をひけていないと思ったから。
- 4 オスはフェロモンに誘われて近寄るものの紙コップの存在しか認識できなかったから。

問6 ——線④「初めのころの当惑も、その理由がわかってみればただの当惑ではなくなった」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 観察が想定外の結果となってしまったことから、これまでのように常識にとらわれていると解決をさまたげることになるとわかったということ。
- 2 望むような実験結果を得ることができなかったものの、科学の世界ではよくあることだということを知って新たな試みを始めたということ。
- 3 予想とは異なる不本意な観察結果に終わってしまったが、貴重な経験を積んだことによつていつそう自信が持てるようになったということ。
- 4 思いもよらないような観察結果となってしまったことで、もう一度常識に従って新たな観察のやり方を考えてみるようになったということ。

問7 ——線⑤「性フェロモンは魔術ではなかった」とありますが、それはどういう意味ですか。それを説明した次の文の空らん に合うように、文中から十五字以内でぬき出して、はじめの五字で答えなさい。

性フェロモンには「有効圏」があり、オスの蛾たちは わけではなかったということ。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

過疎地帯の県立高校に通う、安高彰浩、布施信吾、稲生有一の三人は、中学校からずっと一緒に野球をやってきた仲間である。その彼らが通う高校が廃校になることが決まったため、彰浩たちの学年を最後に新入生の募集は停止された。いまや在校生は四十人に満たない人数となり、活動が続けられる部もほとんどなくなっていた。

「うつへえ、行くぞーっどどどーん」

奇妙な叫び声をあげて、信吾がホームベースめがけて滑り込んでくる。彰浩は、有一の一球を銜えこんだミットで信吾の頭を思いつきり叩いた。

「アウト！」

信吾が頭を抱えて、転がる。そのままうつ伏せになった。

「くっそう。悔しいよう」

こぶしで地を叩く。

「悔しかったら、もうちょいまともなスライディングせえや」

もう一度軽く、今度は尻のあたりを叩く。

「ほら、もう一度やってみいや。ダイヤモンド一周、華麗なる本塁突入のスライディング」

「うへへっいつ」

奇声を発し、信吾は起き上がり、そのまま大きく伸びをした。

「悪いけど、おれ、そろそろ帰るわ」

日はまだ中天にある。彰浩はわずかに目を細めてみた。

「どうした？ 何かあったんか？」

「別に。三年やし、ちっとは勉強しよかて思うてな」

「は？ ふざけんや。おまえが勉強するなら、うちのアニメだつて問題集を広げてるぞ」

「おいおい、猫と一緒にかよ。しかも、でぶでぶのばあさん猫だぜ。悲し過ぎて涙も出んわ。まっ、ともかく今日はここまでにするつてことで。じゃあな」

ひらりと手を振って、信吾は駆け出した。

「おい、信吾、待てよ」

声をかけたけれど振り向かなかった。一定のリズムで走り、駐輪場の陰に消えて行く。

三人しかいないのだから、野球の練習と呼べるものなどできはしない。それでも、午前中に集まり、二時間近く走って、投げて、バットを振って、汗を流す。それが緩やかな決まり事となっていた。

彰浩も、有一も、信吾も、個々の思いや事情を抱いて、諦めたものも捨てざるをえなかったものも数多ある。それでも、ぎりぎり自分たちなりの野球をしようという暗黙の了解が存在していたし、了解のもとに、今日も集まっていたのだ。

練習を切り上げるには、一時間以上早過ぎる。

「なんだ、あいつ」

① 舌打ちしてみる。

「信吾……病院じゃないか……」

マウンドから降りてきた有一が呟いた。ため息みたいな小さな声だった。有一の声はすぐに紛れる。風や物音や他人の声に紛れ、切れ切れになり、消えてしまう。どこか儂い印象は、まだ有一に纏わり付いていた。しかし、今の声ははつきりと彰浩の耳に届いた。

「病院？」

「うん……おふくろさんが入院したって……」

「え？ ほんまか？」

「たぶん……ばあちゃんが、そう言うてたから……」

布施と稲生の家は、近い。有一が転校してきたとき、稲生の祖母がわざわざ信吾のもとに出向き、仲良くしてやってくれと頭を下げたのだと、後になって彰浩は耳にした。旧家の末裔らしく、どこか権高な雰囲気もある老女に深々と低頭されて、信吾は少なからず戸惑ったらしい。ただ、有一を野球部に誘ったのは、義理や義務感からではなく、有一の一球に信吾なりに魅せられたからだ。これもずつと後になって、耳にしたことだ。

「おふくろさんが入院で、そしたら、今、一人か……」

信吾は、早くに父親が亡くなり母親と二人暮らしのはずだ。

信吾の姿が消えた駐輪場に視線を巡らす。そこは、ただひっそりと暗い場所で、彰浩の目には淡い闇以外、何も捉えられなかった。

▼ その夜、警察から電話があったのは十時近かった。テレビを見ていた。今日から甲子園では選抜大会が始まっていたのだ。今年のヒット曲を行進用にアレンジした軽快な音楽が響き、選手たちが誇らしげでもあり、どこかぎこちなさも感じる表情で歩いている。その姿を見るともなしに見ていた。② 本当は見たくなかった。たとえスポーツニュースの中のほんの短い時間であっても見たくない。父が熱心にテレビ画面を見詰めていなければ、すぐにでも消していただろう。そこまでしなくても、立ち上がりさつさと自室にこもればいいのだ。

なのに、彰浩は視野の片隅にテレビ画面を、聴覚の一部で選手宣誓やスタンドのどよめきをしつかりと捉えていた。それらを振り切つてしかめ面のまま居間を出て行くことに少し抵抗があった。どうにもならないことに拘つて、こそこそ逃げ出そうとする自分が卑小で哀れな者に見える。自分で自分を哀れみそうで、怖い。

しかし、それでも、やはり、拘つてしまう。

自分には決して手の届かない場所を堂々と歩いているのは同年代の少年たちだ。力及ばず届かなかったのならまだしも、挑むことさえ許されなかった。同じ国に生まれ、同じ年齢でありなが

ら、自分と彼らの間には無限にも思える隔たりがある。

「ほんま、格差社会やなあ」

ほろりと言葉が零れた。父がテレビの前から振り返り、なんだ？ と問う代わりに、瞬きをす。画面が変わり、女子ゴルファーの顔が大きく映し出されたのを、潮に彰浩は腰をあげた。老猫のアニメが遠慮のない欠伸を漏らす。電話が鳴ったのはそのときだ。由美子が出た。

「はい、もしもし、安高ですが……は？ 警察？」

由美子の横顔から血の気が引いていくのが、はつきりと見て取れた。父も腰を浮かす。二人の兄のどちらかに何事かが起こったのかと、彰浩は大きく息を吸いこんだ。別に運命論者ではないけれど、不運とか不幸とかいうやつは群れて来るような気がしてならない。水の流れに似て低いところに集まってくる。これでもか、これでもかというくらい。

「え？ まあ……信吾ちゃんか」

由美子の丸い身体が、わずかに前に屈みこむ。

信吾？

「はい……はい……わかりました。すぐに……はい三、四十分ほどで、伺えますので……はい、

あの、信吾ちゃんの様子は……ああ、そうですね、はい、では、すぐに」

「信吾がどないしたって？」

由美子が受話器を置くより早く、尋ねていた。口の中が妙に乾く。

「信吾に、何かあったんか？」

「うん、どうも……警察に捕まったみたいや」

「は？ まさか。何で……」

「よう、わからんけど。江草で喧嘩したとか」

江草は、西隣に位置する市だった。四十キロほど離れている。人口数万の小都市だが、近隣では唯一の市だ。入院設備のある総合病院もいくつかある。信吾の母の入院先もたぶん、江草なのだろう。そこまでは、わかる。けれど、そこから先は不明だった。信吾は陽気で調子に乗りやすい性格ではあるけれど、短気でも粗暴でもない。暴力に対して、臆病なところさえあった。不慮の事故に遭ったというならまだしも、喧嘩とは……。

X

苛立ちがこみあげる。父が立ち上がった。

「ともかく、迎えに行かんとあかんじやろ」

落ち着けという眼つきで、彰浩を見やる。

「信吾が迎えに来てくれて、言うてるわけやろが」

「そう。布施さん入院しとるしね、うちしか頼るところ、なかったんやないんかな」

「ほな、早うに行つてやらんと。車のキー、出せや」

「あんたは行かんではよろし。うちと彰浩で行きます」

「なんでや？」

「呑^のんでるやないの。そんなんで警察に迎えに行ったら、あんたの方が捕まるでしょうが。うちが行くから、あんたは後片付けしといて。ちゃんと鍋^{なべ}まで洗^{せん}うてな」

エプロンを脱^ぬぎ捨てると由美子は、壁^{かべ}にかかったキーホルダーに手を伸ばした。

由美子の運転する軽自動車の後部座席で信吾が小さく呻^{うめ}いた。

「痛いかな？」

尋ねた彰浩に、信吾は黙^{だま}ってかぶりを振った。唇^{くちびる}と目の下が、それとわかるほど腫^はれている。

「まあ喧嘩^{けんか}といっても、多勢^{たせい}に無勢^{むせい}というか、向こうは五人もいたわけやし、大人やし、布施^{ふせ}くんは一人やしね。どっちかという被害^{ひがい}者^{しや}みたいなどこもあるから……けど、目撃^{もくげき}者^{しや}の話^わだと、先^まに手^てを出^だしたのは布施^{ふせ}くんらしいし、本人^{ほんにん}も認^まめているから、何^{なに}にも無^なしで帰^{かえ}っていいよってわけには、いかんかってねえ」

いかにも温厚^{おんこう}そうな中年^{ちゅうねん}の警察官^{けいさつ官}は、ひたすら頭^{あたま}を下^{くだ}げる由美子^{ゆみこ}を前にして、猫背^{ねこせ}の姿勢^{しせ}をさらさら丸^{まる}くしていた。

「はつきりとは言^いわれんかったけど、学校^{がっこう}へもナイショにしといてくれるみたいやで。大事^{だいじ}にならんよよかったやないの」

由美子^{ゆみこ}の声^{こゑ}が車内^{くるまうち}に響^{ひび}く。信吾^{のぶご}の隣^{となり}で彰浩^{あきひろ}は、眉^{まゆ}をひそめた。

「母^{はは}さん、声^{こゑ}が大き^{おほ}すぎ」

「あつそう。ごめんな、地声^{ぢこゑ}なもんやから」

「すいません」

口^{くち}の中^{ちゆう}に負^まった傷^{きず}のせいばかりではないだろう、^④信吾^{のぶご}がくぐもった声^{こゑ}で詫^わびを言う。詫^わびな^らんていらぬ。聞^ききたいことは他^{ほか}にある。

「おまえ、何^{なに}で喧嘩^{けんか}なんかしたんや？」

「うん……」

信吾^{のぶご}はうんと言^いったきり、黙^{だま}り込んだ。

「言^いいとうないなら、ええけどな」

「あ……いや、道^{みち}を歩いてたら向^{むか}こうから、おっさん連中^{れんちゆう}が来て……肩^{かた}がぶつかったんや」

「うん、警察^{けいさつ}で聞^きいた。草野^{くさの}球^{たま}のチー^ちムのおっさんたちやったんやろが。何か、試合^{しあひ}の後^{のち}で一杯^{いっぱい}やって酔^よっ払^{はら}つてたつて。向^{むか}こうがよろけて、ぶつかってきたんやろ」

「まあ、酒臭^{しゅくさ}かったけど……ぶつかったやつが、舌^{した}打ち^{うち}して『氣^きをつけろ。イモが』って言うたんや、それで……」

「それだけか？」

信じ^{しん}じられなかつた。『氣^きをつけろ。イモが』という一言^{いちごん}は粗野^{そや}でもあるし、侮蔑^{ぶべつ}的^{てき}でもある。ある者^{あるもの}にとっては充分^{じゅうぶん}に喧嘩^{けんか}の因^{いん}になりうるかもしれない。しかし、信吾^{のぶご}がその一言^{いちごん}だけで激昂^{げききやう}

したとは、とても思えなかった。信じられない。彰浩の視線を受け止めて、信吾が身じろぎする。「電気店の前だったんや」

「え？」

⑤ 「電気店の前で、テレビに甲子園が映ってた。今日、選抜やろ……別に、どうってことないけど……別にどうってことないのに、何か急にいらついて……そこに、ぶつかってこられて……」
信吾が口をつぐむ。由美子が大きく息を吐いた。彰浩は座席に深く座り直し、こぶしを握った。存分に明るい陽光の下を誇らしげに歩くユニフォームの群が浮かぶ。光は眩しく、空気は躍動していた。

挑むことさえ、許されなかった。

「信吾」

いつもよりゆつくりと丁寧ていねいに名前を呼んでみる。

「うん？」

⑥ 「明日も練習、出てくれるか？」

返事の代わりに不鮮明ふせんめいな呻うめきが返ってきた。車が揺れ始める。山越やまこえの道に入り、舗装ほそうが疎おろそかになっているのだ。

小刻しんせうみな震動しんどうに身体をゆだね、彰浩はもう一度強く、こぶしを握り締めた。

(あさのあつこ『このグラウンドで』より)

問1 ~~~~~ 線 a・b の意味として最もふさわしいものを、それぞれ後から一つ選び、番号で答えなさい。

a 潮

1 理由 2 おわり 3 いいわけ 4 機会

b 不慮ふりょの

1 間の悪い 2 思いがけない 3 よくない 4 注意力に欠ける

問2 —— 線①「舌打ちしてみる」とありますが、彰浩はなぜこのような態度をとったと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 信吾が、ふざけてばかりでまじめに練習に取り組んでいなかったから。
- 2 信吾が、長時間練習を続けることに不満を感じているようだったから。
- 3 信吾が、いつもよりずいぶんはやく練習をやめて帰ってしまったから。
- 4 信吾が、ひとりだけ大学に受かるために勉強しているとわかったから。

問3 — 線②「本当は見たくなかった」について、後の問いに答えなさい。

(1) この時の彰浩の気持ちについて説明した次の文の空らん ・ にそれぞれふさわしいことばを入れなさい。ただし、どちらも文中の▼ ▲の中から十字以内でぬき出すものとします。

廃校が決まったため野球部も解散してしまった今の自分にとって、もはや甲子園は であり、テレビに映る選手たちと自分とは が存在しているように感じて、つらくなってしまうから。

(2) — 線②と矛盾するむじゅんような彰浩のふるまいを述べた部分を文中より四十五字以内で探し、はじめの五字を答えなさい。

問4 — 線③「不運とか不幸とかいうやつは群れて来る」とありますが、これと同じ意味になることわざとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 流れにさおさず
- 2 弱り目にたたり目
- 3 類は友を呼ぶ
- 4 あぶはち取らず

問5 空らん に入れるのに最もふさわしい発言内容を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 けがをしたのか
- 2 相手はどうなった
- 3 あれほど言ったのに
- 4 どういうことなんだよ

問6 ——線④「信吾がくぐもった声で詫びを言う」とありますが、このときの信吾のようすについて述べたものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 傷が痛いのはもちろんだが、自分の力ではどうにもならないことに対しての怒りやいらだちを抑えようとしている。
- 2 喧嘩の傷がひどく痛いことに加え、由美子が自分のことを非難しているように感じられてしよんぼりとなっている。
- 3 傷の痛みもさることながら、大人たちが数人がかりで自分に暴力をふるってきたことに大きなショックを受けている。
- 4 傷の痛みがたえきれないうえに、喧嘩をしたことで警察ざたになってしまい落ち着いて話すことができないでいる。

問7 ——線⑤「電気店の前で、……何か急にいらついて」とありますが、このような気持ちに信吾がなったのはなぜですか。それを説明した次の文の空らん□にふさわしい言葉を文中から十五字以内でぬき出して、はじめの五字で答えなさい。

甲子園を目指すどころか、□から。

問8 ——線⑥「明日も練習、出てこれるか？」とありますが、この時の彰浩の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分たちだけが世の中の不幸をすべて背負い込んだような気持ちになり、半ばやけ気味に練習をもちかけた。
- 2 信吾の怪我の状態が気がかりであり、ほんとうに何も問題がないのかを確かめようと遠慮がちに問いかけた。
- 3 信吾の気持ちを思うとたまらなくなり、その場の雰囲気但至少でも変えようとして思わず口にしてしまった。
- 4 甲子園という目標は失われてしまったが、かえって絆が深まったことを野球をすることを確認しようとした。
- 5 信吾の野球に対する思いが自分と変わりがないものだとわかって、ともに野球をしたいという思いを伝えた。

(問題は次のページに続く)

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

居直りりんご

石原吉郎

ひとつだけあとへ
とりのこされ
りんごは ちいさく
居直ってみた
りんごが一個で
居直っても
どうなるものかと
かんがえたが
それほどりんごは
気がよわくて
それほどこころ細かったから
やっぱり居直ることにして
あたりをぐるつと
見まわしてから
たたみのへりまで
ころげて行って
これでもかとちいさく
居直ってやった

（『声で楽しむ 美しい日本の詩』より）

問1 この詩をふつうの文章の形で書いたとき、句点（。）はいくつ使いますか。数字で答えなさい。

問2 この詩では、「りんご」がまるで人間のようにふるまうようすがえがかれています。このように、人間以外のものを人間にたとえる表現技法を何と言いますか。ひらがな五字で答えなさい。

問3 「居直る」とは、「りんご」のどのようなようすを表したのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 弱い気持ちをのりこえて、強い思いを手に入れたようす。
- 2 弱い気持ちでありながらも、強いそぶりを見せるようす。
- 3 弱い気持ちをかくせず、強くなることができないようす。
- 4 弱い気持ちと見せかけて、強さをかくそうとするようす。

問4 この詩から読み取れる「りんご」のようすについて説明したものととして、ふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 現在「りんご」は一個だけだが、以前にはこのほかにもりんごがあった。
- 2 一個になってしまった「りんご」は、さみしい気持ちをおさえられない。
- 3 ころぼそくなつた「りんご」は、最も目立つ場所まで転がっていった。
- 4 この「りんご」は自分なりに、自身がおかれている状況を理解している。

問5 次に示すのは、この詩についての小学生の感想です。文中の空らん①～③に入ることばを詩の中からさがし、それぞれ指定された字数でぬき出して答えなさい。

りんごが居直るといふ内容に、ユーモアを感じました。さらに、居直っているのにもかかわらず、そのようすを①(4字)と表現するところに、おかしさを感じました。最初は、

②(6字)

だけだったのが、まよった末に、

③(7字)

と表せるようになったりん

ごの変化には、共感できる部分があります。

4 次の①～⑤の漢字二つに同じ部首をつけることで、熟語ができあがります。後の□の中
から部首を選んで熟語を完成させなさい。

例 令・東 + にすい || (答) 冷凍

①早・化 ②月・音 ③冬・吉 ④田・相 ⑤斤・刀

ひへん	こころ	くさかんむり	れつか	いとへん
くにがまえ	しんによ	やまいだれ		

